

子どもの運動・教育 仙台大でシンポ 柴田

幼児期「自然体験が重要」

仙台大は最新の知見を地域で共有しようと「第1回国際シンポジウム」を、柴田町の同大キャンパスで開いた。シンポでは、子どもの運動教育研究や教育制度に関わる国内外の専門家4人が登壇し、研究成果などを報告した。

仙台大子ども運動教育学科の柴田千賀子教授は、日

本の5、6歳を対象に自然体験が体の発達に及ぼす影響を研究。自然環境の中で過ごすことで、ストレスの指標となる唾液中のコルチゾール値が低減、腸内環境にも好影響がある可能性を報告した。「幼児期に自然に触れる時間の重要性について考えるきっかけにしてほしい」と訴えた。

シンガポールの国立大で

南洋理工大国立教育研究所のチョン・ホジン教授はシンガポールの教員養成システムを紹介。「教育省と国立教育研究所、学校の三者が連携して、継続的な専門性開発を制度的に保証している。大学と学校現場が有機的に連携し、教員養成の質を高めている」と説明した。

9月30日に開催したシンポは、仙台大と南洋理工大の教授の共同研究をきっかけに実現。学生や地元の関係者ら約120人が参加した。東北大未来科学技術共同研究センターの鈴木教郎教授、南洋理工大国立教育研究所のマイケル・チア教授の講演もあった。

(高橋唯之)



子どもの運動教育の研究成果などが報告されたシンポジウム